

中学生の逸脱行為に関する発達の検討

西野 泰代

(受付 2012年9月25日)

問題と目的

本研究は、中学生を対象に、中学3年間で、子どもたちがどのような非行行為をどのような形で経験するのかを実証的に検討することを目的とするものである。警察庁生活安全局少年課(2011)の定義によれば、非行とは「殺人・強盗・放火などの凶悪犯、暴行・恐喝などの粗暴犯、窃盗犯、風俗犯といった犯罪・触法行為や飲酒、喫煙、けんか、怠学、金品持ち出し、薬物乱用、不健全性の行為、その他自己または他人の徳性を害するような不良行為」を指す。本研究では、学校に通っている中学生を対象とすることから、非行行為の中でも初発型非行¹⁾と呼ばれるものと不良行為のみを扱うことにし、以下、これらを総称して「逸脱行為」と呼ぶことにする。

鈴木(1984)は、普通に学校に通う中学1年生から高校3年生までを対象とした横断データを用いて、非行体験の年齢的变化について検討をした。その結果、法律違反行為(恐喝、万引き、自転車窃盗など)は、総じて体験率が低く、また、中学生と高校生とでは体験率にほとんど違いが見られず、学年差が少なかったのに対し、不良行為は、男女とも中学生に比べ高校生で体験率が増し、そのうち、喫煙、夜遊びは学年とともに体験率が平均的に高くなる傾向があったこと、飲酒、怠学については中学3年あたりで急速に体験率が高まったことを報告した。小保方・無藤(2005)は、普通に学校に通う中学1年生から3年生までを対象とした横断データを用いて、非行傾向行為(喫煙、飲酒、怠学、夜遊び、万引き、自転車無断使用あるいは窃盗の6項目)の経験について検討したが、女子では全ての項目で学年の進行とともに体験率が高くなり、そのうち、喫煙、飲酒、万引き、自転車無断使用あるいは窃盗については中学2年あたりで急速に体験率が高まったことを示した。男子では、全ての項目において中学2年あたりで急速に体験率が高まったが、喫煙、怠学、万引き、自転車無断使用あるいは窃盗については、3年で体験率が減少したことが示された。このように特定の行為については、体験率に関して発達上の傾向が見られるようであるが、しかしながら、子

1) “単純な動機、かつ犯行手段が容易で、結果が軽微な非行であり、本格的な非行へと深化する可能性の高いもの”をまとめて初発型非行と呼ぶ。具体的には万引き・自転車盗・オートバイ盗・占有離脱物横領という非侵入盗犯を中心とした四つの非行罪種から構成される(緑川, 1999)。

どもたちの逸脱行為の体験率が実際にどの時期に高まるのかについて明らかにするためには、縦断データを用いた検討をする必要がある。

清永（1982）は、不良行為少年として補導された少年たちのその後の2年間を追跡した調査から、不良行為少年が再不良行為者化する確率は高く、さらに、非行者化する割合は、一般の少年の場合より、男女いずれもきわめて高くなることを報告した。さらに、清永（1990）は、「非行を何回も繰り返す少年ほど問題が深い」ことを示し、犯罪を減らすためには「少年問題を生み出す因果の流れというものを明らかにする」必要があることを説いた。また、麦島（1990）は、非行の検挙数の5割は再犯であり、非行対策を考える上で、初回非行の抑制と再犯抑制とは視点を変える必要があることを示した。こうしてみると、非行を予防する上で、子どもたちの逸脱行為経験の量や形態の動向を明らかにし、逸脱行為を生み出すプロセスについて検討することは非常に意義のあることだと思われる。

逸脱行為を生み出すプロセスの1つとして、非行性の深化が挙げられる。「非行は深化していく（緑川，1999）」という指摘を検証する場合、ある2時点と比較しただけでは、「より深刻になる」という現象を示すことが出来ても、重篤な非行へ至るプロセスを明らかにすることは出来ない。このプロセスを明らかにするためには、一人ひとりの子どもを追跡し、検討する必要がある。しかしながら、非行の好発時期とされる14歳から16歳（警察庁生活安全局少年課，2011）の時期に、子どもたちが、どのような逸脱行為をしているのか、また、子どもたちのさまざまな逸脱行為がどの時期に起こりやすいのかについて、調査対象を追跡し、実証的に扱った研究は日本ではあまり見られない。小保方（2006）は、学校に通っている中学生を対象とし、非行傾向行為の先行要因について検討するため、1学期と2学期の2時点における縦断調査を行った。先行研究（Coley, Morris, & Hernandez, 2004; Pettit, Bates, Dodge, & Meece, 1999; Rueter & Conger, 1998）によると、青年期における問題行動の変化を測定するには、1～2年の期間枠が適当であるとされる。そうであれば、プロセスについて検討するためには、1～2年の期間枠で3時点以上の縦断研究が望ましいであろう。

西野・氏家・二宮・五十嵐・井上・山本（2009）は、中学1年生を3年間追跡した3時点でのデータを用いて中学生の非行が深化するプロセスについて検討した。その結果、万引きや自転車を盗むといった初発型非行は、それ以前に飲酒や喫煙といった軽微な虞犯行為がなされたのち起こる可能性が高いことが示唆された。すなわち、中学生の非行が深化するプロセスが被験者内データを用いて実証的に明らかにされたのである。ただし、西野ほか（2009）では軽微な虞犯行為14項目をそれぞれ等価として扱っており、軽微な虞犯行為の中でどのような行為が非行深化のカギとなりやすいのかについては明らかにされていない。

欧米においては、子どもたちの問題行動のうち、攻撃的な行動や反社会的な行動は、青年期の非行や成人してからの犯罪行為の予兆となることがあると考えられ、暴力や非行などの

行為を縦断的に検討した研究がいくつか見られる (Bongers, Koot, Ende, & Verhulst, 2004; Broidy, Nagin, Tremblay, Bates, Brame, Dodge, Fergusson, Horwood, Loeber, Laird, Lynam, Moffitt, Pettit, & Vitaro, 2003; Lahey, Schwab-Stone, Goodman, Waldman, Canino, Rathouz, Miller, Dennis, Bird, & Jensen, 2000; Nagin & Tremblay, 1999)。子どもの生まれた年によって非行の動向が異なってくる (麦島, 1990) という示唆もあり, 1時点における横断データでは, 各コホートに属する子どもたちの特性やその時点での社会状況, 環境の違いなどの問題を排除できない。ただし, 縦断データにも, 複数回の調査に全て参加したという, 限られた人たちだけを対象とすることで, 全体の姿が反映されにくいといった欠点がある。それゆえ, より正確な情報を得るためには, 複数のアプローチからの結果を総合する形で検討することが望ましいと考えられる。

以上のことから, 本研究では, 子どもたちの自己申告による逸脱行為経験の横断データと縦断データそれぞれの結果を比較することにより, 子どもたちの中学3年間における逸脱行為の量の動向および形態の動向について多角的に検討し, 逸脱行為に関する子どもたちの実態に迫ることを目的とする。

本研究では, 中学生を対象として, 次の3つのことをする。

- 1) ある1時点において, 中学1年～3年それぞれの学年の生徒が, 逸脱行為をどのくらい経験しているかについて比較検討する (横断データ)。
- 2) 1) で対象とした中学1年生を1) 時点の1年後, 2年後と追跡してデータを取り, 1つのコホートについての中学3年間での逸脱行為の発達的变化を検討する (追跡データ)。これは1) で得られた結果が, 子どもたちの発達に伴う逸脱行為経験の傾向を示したものなのか, あるいは, 学年ごとのコホート自体の持つ逸脱行為経験の特徴を示すのかを比較検討するためである。
- 3) 2) のデータに対し, 3回の調査全てに参加した生徒のみを分析対象とし, 逸脱行為の縦断的变化について, また, 逸脱行為を経験する子どもがどのような形態で逸脱行為を経験するのか, すなわち, ある逸脱行為を重ねて経験するのか, 複数の逸脱行為を重複して経験するのか, 軽微な逸脱行為なのか, 重篤な逸脱行為なのかということについて検討する (縦断データ)。

本研究では, 「非行が深化する」ことを「逸脱行為の中でも軽微なものから重篤なものへの推移」と捉え, これを検討するものである。1)～3) について検討するにあたっての男女差の問題であるが, 実際に補導, 検挙された少年の実数から見ると, 男子の数は女子の3倍近くあり (警察庁生活安全局少年課, 2011), また, 清永 (1982) は, 不良行為少年を初発で経験した行為のタイプ別に分類してその再不良行為者化の割合をみたとき, 男子と女子で

は高い割合を示すタイプが異なることを報告した。そうしてみると、男子と女子では行為が多発する時期や行為経験の形態に相違のあることが予想される。そこで、本研究では、特定の逸脱行為が多発する時期や経験の量および形態に性差があるであろうと予測し、これも併せて検討する。

方 法

調査対象および調査時期

A 県内の公立中学校 9 校 4,483 名（1 年生 1,448 名，2 年生 1,514 名，3 年生 1,521 名）に対し、20XX 年 9 月に質問紙調査を実施した（1 回目）。また、これらの対象者のうち 1 年生のみ、その翌年 9 月（2 回目）、翌々年 9 月（3 回目）に追跡調査を実施した。今回の分析に対する有効回答者数は 1 回目 2,417 名（1 年生 835 名〈男子 397 名／女子 438 名〉，2 年生 828 名〈男子 391 名／女子 437 名〉，3 年生 754 名〈男子 390 名／女子 364 名〉），2 回目 602 名〈男子 289 名／女子 313 名〉，3 回目 1,011 名〈男子 516 名／女子 495 名〉であった。このうち、縦断データの対象者としたのは、3 回の調査全てに回答し、回答に不備や欠損の無かった者 344 名（男子 156 名，女子 188 名）であった。

調査手続き

調査に先立ち、教育委員会を通じて調査の趣旨等を各学校長らに説明した後、各学校に調査を依頼し、調査用紙は学校で配布された。実施は各回とも持ち帰りによる方法をとった。各家庭には調査の趣旨を説明する文書を配布し、調査への協力は本人の自由意志に任せた。回収は学校で行われたが、回答内容の秘密保持のため、質問用紙とともに配布された封筒に入れて厳封した上で提出するよう依頼した。封筒には縦断データを取るための ID 番号のみ記載し、個人を特定できる情報は一切表記されなかった。

調査内容

本研究で扱う「逸脱行為」は、警察庁生活安全局から 1999 年（平成 11 年）10 月 25 日に出された「不良行為少年の補導について」（平成 11 年丙少発第 19 号）で、「不良行為の種類および様態」として示された項目と初発型非行と呼ばれる行為から成る 22 項目である。各項目に対し、そのような行動を過去 3 ヶ月間にどのくらいしたか 4 件法（1 = 1 度もなかった，2 = 1 度だけあった，3 = 数回あった，4 = 何度もあった）でたずねた。

結果と考察

逸脱行為項目についての分析

1回目調査データについて、4件法で調査した逸脱行為経験の度数分布をみたところ、「夜遅く遊びで外出したこと」「酒を飲んだこと」「自分と同じ年ごろの人に暴力をふるったこと」の3項目を除き、全ての項目について90%以上の生徒が「1度もなかった」と回答しており、残り3項目についても80%以上の生徒が「1度もなかった」と回答している。そこで、「1度もなかった」と回答した生徒を除いた残りの生徒たちの平均値を算出したところ、2.51～3.02（3.00以上は無断外泊、シンナー・薬物の使用、出会い系サイトの利用の3項目のみ）であった。つまり、中学生の中で、逸脱行為をする者は1割ほどで、しかも経験したとしても1度だけで終わっている場合がほとんどだという状況がうかがえる。そこで、子どもたちが、どのような逸脱行為をどの時期に経験するのかについての検討は、子どもたちの逸脱行為経験状況を「細かく、どの程度」というよりも「した、していない」という基準でおこなうことにした。そのため、4件法で回答されたものを1-0データ：1（経験あり／「1度だけあった」「数回あった」「何度もあった」）-0（経験なし／「1度もなかった」）に変換して分析に用いることにした。また、経験者数が少ないこともあり、概念的に同様だと思われる行為に関しては複数の行為をひとつにまとめて用いることにした（怠学：「学校を無断で休んだこと」「学校から無断で抜け出したこと」、不純交遊：「テレクラを利用したこと」「出

Table 1 逸脱行為 19項目

-
- ・学校を無断で休んだり、抜け出したこと。（怠学）
 - ・タバコをすったこと。（喫煙）
 - ・スーパーやコンビニなどで万引きをしたこと。（万引き）
 - ・家の中のお金を無断で持ち出したこと。（家の金持ち出し）
 - ・他の人からお金やものをまきあげたこと。（恐喝）
 - ・親に無断で外泊したこと。（無断外泊）
 - ・夜遅く遊びで外出したこと。（夜遊び）
 - ・バイクや車を無免許で運転したこと。（無免許運転）
 - ・いじめをしたこと。（いじめ）
 - ・公共物や他人のものをわざと壊したこと。（破壊）
 - ・自転車やバイクを盗んだこと。（自転車盗）
 - ・テレクラや出会い系サイトを利用したり、援助交際をしたこと。（不純交遊）
 - ・酒を飲んだこと。（飲酒）
 - ・親に暴力をふるったこと。（親に暴力）
 - ・自分と同じ年ごろの人に暴力をふるったこと。（同年代に暴力）
 - ・シンナーや薬物を吸引したこと。（シンナー・薬物）
 - ・教師に暴力をふるったこと。（教師に暴力）
 - ・家の外でお金を盗んだこと。（外で金盗み）
 - ・異性と性交渉をしたこと。（性交渉）
-

注. 論文の中では、() 内の表記を用いる。

会い系サイトを利用したこと」「援助交際をしたこと」；それぞれ該当する項目のどれか 1 つでも経験があれば 1，なければ 0 とする)。その結果，項目数は 19 項目 (Table 1) となった。

横断データによる比較

横断データ (第 1 回目全学年対象) を用いて，19 項目の逸脱行為を経験した者の数に学年差が見られるかどうかを調べるために，男女別に χ^2 検定を行った結果を Table 2 に示す。「喫

Table 2 逸脱行為経験者の学年・男女別該当人数と χ^2 検定の結果 (横断データ)

		χ^2 値	自由度	Cramer's V	学年別人数 (調整済み残差)			
					1 年	2 年	3 年	
怠学	男	2.20	2	0.04	25 (-0.3)	21 (-1.1)	31 (1.4)	
	女	3.41	2	0.05	41 (1.6)	26 (-1.6)	28 (0.0)	
喫煙	男	9.98	2	**	0.09	20 (-1.0)	15 (-2.1)	35 (3.1)
	女	0.66	2		0.02	23 (-0.1)	21 (-0.6)	22 (0.8)
万引き	男	8.00	2	*	0.08	9 (-2.2)	14 (-0.5)	24 (2.7)
	女	5.63	2		0.07	20 (2.4)	9 (-1.4)	8 (-1.0)
家の金持ち出し	男	6.29	2	*	0.07	32 (0.1)	21 (-2.2)	40 (2.1)
	女	3.07	2		0.05	34 (1.6)	26 (-0.3)	17 (-1.4)
恐喝	男	3.41	2		0.05	4 (-1.2)	5 (-0.6)	10 (1.8)
	女	0.16	2		0.01	5 (-0.2)	6 (0.4)	4 (-0.2)
無断外泊	男	5.54	2		0.04	3 (-2.1)	8 (0.2)	12 (1.9)
	女	1.81	2		0.04	6 (-1.3)	11 (0.8)	9 (0.6)
夜遊び	男	23.73	2	***	0.14	52 (-3.9)	71 (-0.6)	104 (4.5)
	女	5.04	2		0.06	70 (-1.8)	80 (-0.1)	80 (2.0)
無免許運転	男	2.95	2		0.05	5 (-1.1)	6 (-0.6)	11 (1.7)
	女	0.80	2		0.03	4 (0.1)	5 (0.7)	2 (-0.8)
いじめ	男	14.18	2	**	0.11	65 (3.7)	39 (-1.2)	32 (-2.5)
	女	23.96	2	***	0.14	65 (4.9)	30 (-2.2)	21 (-2.8)
破壊	男	1.81	2		0.04	21 (-1.0)	30 (1.3)	24 (-0.2)
	女	0.60	2		0.02	19 (-0.2)	18 (-0.5)	19 (0.8)
自転車盗	男	9.12	2	*	0.09	4 (-2.4)	9 (-0.4)	17 (2.8)
	女	4.08	2		0.06	4 (-1.6)	7 (-0.2)	10 (1.9)
不純交遊	男	4.52	2		0.06	19 (0.4)	11 (-2.0)	23 (1.6)
	女	4.09	2		0.06	13 (-2.0)	24 (1.1)	20 (0.9)
飲酒	男	7.92	2	*	0.08	71 (-1.2)	67 (-1.6)	95 (2.8)
	女	6.16	2	*	0.07	77 (-2.4)	96 (0.6)	88 (1.8)
親に暴力	男	0.58	2		0.02	25 (-0.7)	28 (0.1)	30 (0.6)
	女	7.70	2	*	0.08	45 (2.7)	29 (-0.8)	19 (-1.9)
同年代に暴力	男	11.21	2	**	0.10	130 (3.1)	105 (-0.4)	87 (-2.7)
	女	37.99	2	***	0.18	72 (6.1)	29 (-2.5)	17 (-3.8)
シンナー・薬物	男	0.30	2		0.02	2 (-0.3)	2 (-0.3)	3 (0.5)
	女	4.85	2		0.06	0 (-1.1)	0 (-1.0)	2 (2.2)
教師に暴力	男	0.00	2		0.00	6 (0.0)	6 (0.0)	6 (0.0)
	女	3.47	2		0.05	3 (-1.4)	9 (1.8)	4 (-0.4)
外で金盗み	男	2.90	2		0.05	4 (-0.6)	3 (-1.1)	8 (1.7)
	女	0.16	2		0.01	3 (-0.4)	4 (0.3)	3 (0.0)
性交渉	男	2.97	2		0.05	8 (-1.4)	11 (-0.2)	16 (1.6)
	女	9.89	2	**	0.09	6 (-2.6)	13 (-0.1)	19 (2.8)

* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

煙」「万引き」「家の金持ち出し」「夜遊び」「自転車盗」の5項目で男子のみ有意差が確認された。「親に暴力」「性交渉」の2項目では女子のみ有意差が認められた。「いじめ」「飲酒」「同年代に暴力」の3項目では男女ともに有意差が確認された。調整済み残差により有意差検定を行った結果をまとめてみると、3年生での経験者が有意に多い項目は、「喫煙（男）」「万引き（男）」「家の金持ちだし（男）」「夜遊び（男）」「自転車盗（男）」「飲酒（男）」「性交渉（女）」であった。このうち「万引き（男）」「夜遊び（男）」「自転車盗（男）」「性交渉（女）」については1年生での経験者が有意に少なかった。「いじめ（男）」「いじめ（女）」「親に暴力（女）」「同年代に暴力（男）」「同年代に暴力（女）」では、1年生での経験者が有意に多く、このうち「親に暴力（女）」以外の項目では3年生での経験者が有意に少なかった。「飲酒（女）」では、1年生での経験者が有意に少なかった。

これらの結果は、喫煙、飲酒、夜遊びという不良行為について、小保方・無藤（2005）および鈴木（1984）の報告とほぼ一致し、横断データを見る限りでは、中学生の逸脱行為のうち特定の行為が多発する時期に一定の傾向があるようだ。しかしながら、鈴木（1984）が、法律違反行為（恐喝、万引き、自転車窃盗など）は、総じて体験率が低く、また、学年差が小さいと報告したのに対し、今回の結果において、経験率は確かに低いが、男子で、万引き、自転車窃盗の経験者数が、学年とともに多くなっており、統計上、その有意差が確認された。

コホートによる差の問題

先述したように、1時点における横断データでは、各コホートに属する子どもたちの特性やその時点での社会状況、環境の違いなどの問題を排除できない。そこで、3つのコホートによって示された逸脱行為経験の傾向と、実際に1つのコホートを追跡して得られた結果とを比較するため、第1回目調査時の1年生を対象に、1年後の9月と2年後の9月に同様の調査を実施して得られた追跡データに対して、横断データと同じ分析を行った。その結果をTable 3に示す。「万引き」「無断外泊」「いじめ」「無免許運転」「親に暴力」「性交渉」「同年代に暴力」の7項目で男子のみ有意差が確認され、「家の金持ちだし」「シンナー・薬物」の2項目では女子のみ有意差が認められた。「夜遊び」では男女ともに学年の有意差が認められた。調整済み残差により有意差検定を行った結果をまとめてみると、「家の金持ちだし（女）」は、2年生での経験者数が有意に少なく、逆に、2年生での経験者数が有意に多い項目は、「万引き（男）」「無免許運転（男）」「親に暴力（男）」であった。「いじめ（男）」は、2年生での経験者数が有意に多く、3年生での経験者が有意に少なかった。「同年代に暴力（男）」は、1年生での経験者数が有意に多く、3年生での経験者が有意に少なかった。逆に「夜遊び（男）」「夜遊び（女）」は、3年生での経験者数が有意に多く、1年生での経験者が有意に少なかった。「シンナー・薬物（女）」は、3年生での経験者数が有意に多かった。1

Table 3 逸脱行為経験者の学年・男女別該当人数と χ^2 検定の結果 (追跡データ)

		χ^2 値	自由度	Cramer's V	学年別人数 (調整済み残差)		
					1 年	2 年	3 年
怠学	男	1.08	2	0.04	19 (-0.5)	19 (1.0)	19 (-0.5)
	女	4.46	2	0.07	35 (1.8)	22 (0.2)	18 (-2.0)
喫煙	男	2.58	2	0.06	14 (-0.8)	17 (1.6)	14 (-0.7)
	女	3.18	2	0.06	21 (0.6)	9 (-1.8)	21 (1.1)
万引き	男	7.47	2	*	8 (-0.6)	13 (2.6)	5 (-1.8)
	女	4.65	2	0.07	18 (1.3)	5 (-2.1)	15 (0.7)
家の金持ち出し	男	1.46	2	0.04	27 (1.0)	18 (0.1)	19 (-1.1)
	女	6.03	2	*	26 (0.6)	10 (-2.4)	28 (1.7)
恐喝	男	2.25	2	0.05	3 (-1.5)	6 (0.9)	7 (0.6)
	女	2.70	2	0.05	5 (0.3)	1 (-1.6)	6 (1.2)
無断外泊	男	7.86	2	*	2 (-2.8)	9 (1.3)	12 (1.6)
	女	4.21	2	0.07	6 (-1.0)	4 (-1.1)	12 (2.0)
夜遊び	男	29.04	2	***	37 (-5.2)	56 (1.1)	90 (4.2)
	女	9.98	2	**	61 (-2.3)	53 (-0.8)	87 (3.1)
無免許運転	男	7.45	2	*	3 (-1.7)	10 (2.7)	5 (-0.8)
	女	3.51	2	0.06	4 (-1.0)	3 (-0.9)	9 (1.9)
いじめ	男	11.74	2	**	45 (0.4)	46 (2.8)	29 (-3.0)
	女	2.38	2	0.05	52 (1.5)	30 (-0.8)	37 (-0.8)
破壊	男	4.39	2	0.07	13 (-0.5)	17 (2.0)	11 (-1.4)
	女	0.62	2	0.03	14 (-0.6)	12 (-0.1)	17 (0.7)
自転車盗	男	5.40	2	0.07	4 (-2.3)	10 (1.1)	13 (1.3)
	女	4.75	2	0.09	4 (-2.0)	7 (0.2)	12 (1.8)
不純交遊	男	4.50	2	0.07	13 (-0.7)	17 (2.1)	11 (-1.2)
	女	3.16	2	0.06	9 (-1.5)	14 (1.6)	12 (0.0)
飲酒	男	0.04	2	0.01	50 (0.0)	38 (-0.2)	52 (0.2)
	女	0.06	2	0.01	65 (0.0)	51 (0.2)	59 (-0.2)
親に暴力	男	6.27	2	*	17 (-0.3)	21 (2.3)	12 (-1.9)
	女	3.35	2	0.06	34 (1.8)	18 (-0.7)	20 (-1.2)
同年代に暴力	男	45.62	2	***	99 (5.9)	51 (0.2)	32 (-6.0)
	女	3.50	2	0.06	57 (1.9)	33 (-0.8)	38 (-1.2)
シンナー・薬物	男	2.77	2	0.06	1 (-1.4)	4 (1.4)	3 (0.1)
	女	6.83	2	*	0 (-1.9)	1 (-0.6)	5 (2.5)
教師に暴力	男	3.05	2	0.06	3 (-1.7)	7 (1.1)	8 (0.7)
	女	3.12	2	0.06	2 (-1.1)	2 (-0.6)	6 (1.8)
外で金盗み	男	2.19	2	0.05	4 (-0.9)	7 (1.5)	5 (-0.4)
	女	4.18	2	0.07	2 (-1.8)	4 (0.0)	8 (1.8)
性交渉	男	6.17	2	*	7 (-2.5)	15 (1.4)	18 (1.1)
	女	4.14	2	0.07	6 (-1.0)	4 (-1.1)	12 (2.0)

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

年生での経験者数が有意に少ないのは、「無断外泊 (男)」「性交渉 (男)」であった。

こうしてみると、横断データと追跡データで学年ごとの経験者数の有意な増減に同じ傾向が見られるのは、「夜遊び (男)」「同年代に暴力 (男)」のみであった。

縦断データによる比較

第1回目調査時の1年生を対象に、1年後の9月と2年後の9月に同様の調査を実施して得られた追跡データのうち、3回の調査全てに回答し、また、回答に不備や欠損の無かった344名のデータを縦断データとし、先の2つのデータに対する分析と同じ分析を行った。その結果をTable 4に示す。「いじめ」で女子のみ、「夜遊び」「同年代に暴力」では男女で有意差が確認された。調整済み残差により有意差検定を行った結果をまとめてみると、「いじめ

Table 4 逸脱行為経験者の学年・男女別該当人数と χ^2 検定の結果(縦断データ)

		χ^2 値	自由度	Cramer's V	学年別人数 (調整済み残差)		
					1 年	2 年	3 年
怠学	男	1.10	2	0.05	6 (-1.0)	9 (0.3)	10 (0.7)
	女	2.32	2	0.06	15 (1.4)	11 (-0.1)	8 (-1.3)
喫煙	男	3.42	2	0.09	9 (1.7)	5 (-0.3)	3 (-1.4)
	女	0.64	2	0.03	8 (0.2)	6 (-0.8)	9 (0.6)
万引き	男	0.25	2	0.02	3 (0.3)	3 (0.3)	2 (-0.5)
	女	5.42	2	0.10	8 (1.9)	5 (0.2)	1 (-2.1)
家の金持ち出し	男	1.02	2	0.05	14 (1.0)	10 (-0.5)	10 (-0.5)
	女	0.58	2	0.03	13 (0.8)	10 (-0.4)	10 (-0.4)
恐喝	男	1.01	2	0.05	1 (-0.9)	3 (0.9)	2 (0.0)
	女	0.50	2	0.03	1 (-0.4)	1 (-0.4)	2 (0.7)
無断外泊	男	2.66	2	0.08	1 (-1.6)	4 (0.5)	5 (1.1)
	女	1.01	2	0.04	2 (-0.5)	2 (-0.5)	4 (1.0)
夜遊び	男	6.52	2	*	20 (-2.5)	33 (0.7)	37 (1.7)
	女	16.29	2	***	21 (-3.8)	41 (0.7)	52 (3.1)
無免許運転	男	5.51	2	0.11	0 (-1.9)	5 (2.2)	2 (-0.3)
	女	5.50	2	0.10	2 (-0.3)	0 (-1.9)	5 (2.2)
いじめ	男	1.65	2	0.06	27 (1.0)	24 (0.2)	19 (-1.2)
	女	7.01	2	*	22 (2.2)	16 (0.2)	8 (-2.4)
破壊	男	0.99	2	0.05	7 (-1.0)	11 (0.7)	10 (0.3)
	女	1.38	2	0.05	6 (0.0)	8 (1.0)	4 (-1.0)
自転車盗	男	2.42	2	0.07	2 (-1.1)	6 (1.5)	3 (-0.4)
	女	2.65	2	0.07	1 (-1.6)	4 (0.5)	5 (1.1)
不純交遊	男	0.13	2	0.02	5 (-0.2)	6 (0.4)	5 (-0.2)
	女	0.66	2	0.03	6 (-0.6)	9 (0.8)	7 (-0.2)
飲酒	男	2.01	2	0.07	27 (1.4)	20 (-0.6)	19 (-0.8)
	女	0.48	2	0.03	29 (-0.6)	32 (0.1)	34 (0.6)
親に暴力	男	0.73	2	0.04	8 (0.6)	7 (0.2)	5 (-0.8)
	女	2.31	2	0.06	15 (0.6)	16 (0.9)	9 (-1.5)
同年代に暴力	男	16.74	2	***	54 (3.1)	44 (0.8)	23 (-3.9)
	女	15.04	2	**	30 (3.8)	14 (-1.1)	9 (-2.7)
シンナー・薬物	男	2.01	2	0.07	0 (-1.2)	1 (0.0)	2 (1.2)
	女	2.00	2	0.06	0 (-0.7)	0 (-0.7)	1 (1.4)
教師に暴力	男	2.04	2	0.07	1 (-1.4)	4 (0.7)	4 (0.7)
	女	3.53	2	0.08	0 (-1.4)	3 (1.8)	1 (-0.4)
外で金盗み	男	0.40	2	0.03	1 (-0.6)	2 (0.3)	2 (0.3)
	女	0.40	2	0.03	1 (-0.6)	2 (0.3)	2 (0.3)
性交渉	男	2.43	2	0.07	4 (-1.0)	9 (1.5)	5 (-0.5)
	女	1.42	2	0.05	4 (-1.2)	7 (0.3)	8 (0.8)

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

〔女〕では3年生での経験者が有意に少なく、1年生での経験者が有意に多かった。「夜遊び（男）」では、1年生での経験者が有意に少なく、「夜遊び（女）」では、3年生での経験者が有意に多く、1年生での経験者が有意に少なかった。「同年代に暴力」は、男女ともに1年生での経験者が有意に多く、3年生での経験者が有意に少なかった。

以上のことから、横断、追跡、縦断それぞれのデータで得られた3つの視点を総合して検討してみると、「いじめ」「同年代に暴力」は男女ともに1年生での経験が多く、学年の進行とともに徐々に減少してゆく傾向にある行為であるようだ。それに対し、「夜遊び」は男女ともに3年生での経験が多く、学年の進行とともに経験する子どもが増えてくる行為であるようだ。

本研究では、横断データにおいて、初発型非行とされる「万引き」「自転車盗」の経験者が、学年とともに有意に多くなることが確認された。初発型非行は、刑法犯少年全体に占める割合が7割を超え（警察庁生活安全局少年課，2011），単純な動機で安易に行われることが多く、繰り返すうちに規範意識を失い、重大な非行に至る恐れのあるいわば「重大非行の入り口」とも言われている。これらの行為について、横断データと同様の経験傾向を縦断データで確認することが出来なかったのは、「万引き」「自転車盗」という逸脱行為が、可変性のある行為だということの意味するのかもしれない。すなわち、一人ひとりの子どもたちを追跡したときに、ある行為の経験が、途中から「万引き」や「自転車盗」という行為に推移する可能性を示唆するのかもしれない。

縦断データによる被験者内変化について

縦断データによる被験者間の比較により、子どもたちが中学3年間でどのような逸脱行為をどの時期に経験する傾向にあるのかを見てきた。次に、それぞれの子どもが、逸脱行為を経験するとき、どのような経験の仕方をするのかについて検討する。最初に、中学3年間で1度も逸脱行為を経験したことがない子どもはどれくらいいるのか、1度だけ経験した子どもはどれくらいいて、その経験項目は何であるのかについて検討する。次に、行為別に同じ行為が重ねて経験されるかどうか、また、2つ以上の行為を重ねて経験する子どもはどのような行為を重ねて経験するのかについて検討する。

縦断データの対象者344名それぞれの子どもが3回の調査時点それぞれで「経験あり」と回答した逸脱行為を合計した数について Table 5 に示す。1度も逸脱行為を経験していない子どもは94名（27.3%）であった。1度だけ（1つの行為を1回だけ）経験した子どもは70名（20.3%）であった。そこで、1度だけ逸脱行為を経験した子どもが、どの行為を経験したのかを見てみたところ、「家の金持ち出し（4名）」「夜遊び（23名）」「いじめ（11名）」「親に暴力（5名）」「性交渉（2名）」「怠学（3名）」「不純交遊（2名）」「飲酒（8名）」「同年

代に暴力（12名）」の9項目に該当し、法律違反行為を経験したものは一人もいなかった。

次に、3回の調査すべてにいずれかの逸脱行為の経験ありと回答した子どもがいる項目は、「怠学」（女子2名）、「喫煙」（男女各1名）、「家の金持ち出し」（男子1名、女子2名）、「夜遊び」（男子4名、女子8名）、「いじめ」（男子6名、女子1名）、「不純交遊」（男子1名）、「飲酒」（男子7名、女子8名）、「親に暴力」（男子1名、女子2名）、「同年代に暴力」（男子13名、女子2名）であった。この子どもたちの中で2項目以上について3回の調査すべてに経験ありと回答した子どもを対象として、ある逸脱行為を重ねて経験する子どもは、他にどのような逸脱行為を重ねて経験しているのかについて検討した。その結果、11名（男子4名、女子7名）の子どもが該当し、内1名（女子）は3項目について3回の調査すべてに経験ありと回答していた。11名のうち残り10名は2項目で3回の調査すべてに経験ありと回答しており、4項目以上について3回の調査すべてに経験ありと回答した者はいなかった。回答状況についてTable 6に示す。Table 6においては、便宜上、この11名に1～11の番号をつけた。重ねて経験される行為は「飲酒」「夜遊び」が多く、3項目を重ねて経験した1番の生徒を除いて他10名全員が「飲酒」「夜遊び」のどちらかを経験していた。「飲酒」「夜遊び」を一緒に経験した生徒は10名中3名いた。残り7名において「飲酒」とともに経験されていた項

Table 5 全調査での逸脱行為の経験数

行為の経験数	人数	%
0	94	27.3
1	70	20.3
2	46	13.4
3	29	8.4
4	26	7.6
5	11	3.2
6	20	5.8
7	8	2.3
8	12	3.5
9	4	1.2
10	3	0.9
11	5	1.5
12	1	0.3
14	3	0.9
15	2	0.6
17	3	0.9
19	1	0.3
20	1	0.3
21	1	0.3
23	1	0.3
25	1	0.3
32	1	0.3
38	1	0.3
計	344	100

Table 6 重ねて経験された逸脱行為

性別		全調査で経験ありと回答した行為		
1	女	いじめ	家の金持ち出し	同年代に暴力
2	男	夜遊び	同年代に暴力	
3	女	飲酒	喫煙	
4	女	飲酒	夜遊び	
5	女	いじめ	夜遊び	
6	男	喫煙	夜遊び	
7	男	飲酒	夜遊び	
8	女	飲酒	親に暴力	
9	女	怠学	夜遊び	
10	女	飲酒	夜遊び	
11	男	飲酒	同年代に暴力	

目は「喫煙」「親に暴力」「同年代に暴力」であり、「夜遊び」とともに経験されていた項目は「喫煙」「いじめ」「怠学」「同年代に暴力」であった。清永（1982）は、不良行為少年の非行化過程について検討する中で、男子では飲酒、喫煙で補導された少年の非行者化率が高いことを示唆し、「たかが飲酒、喫煙だと侮る」ことの危険性を説いたが、本研究の結果からも、「飲酒」「夜遊び」が他の逸脱行為と併せて経験され易い傾向にあり、これらの行為が逸脱行為の積み重ねの糸口になる危険があることが明らかになった。

総 合 考 察

本研究では、中学生を対象として、中学3年間にどのような逸脱行為がどの時期に多発し、また、重ねて経験されやすい行為が何であるのかということについて、横断データ、追跡データ、縦断データを比較することで検討した。以下において、その結果について総合的な考察を行う。

子どもたちの発達過程における逸脱行為の現れ方

軽微な不良行為から法律違反行為までを含む22項目の逸脱行為に対する中学生本人の自己申告による経験報告について検討した結果、中学3年間で、1度でも逸脱行為を経験したことがある者は7割以上いたが、経験したとしても1～2回で終わっている場合がほとんどであった。また、逸脱行為を重複して経験したとしても2～3項目の経験でとどまっており、しかもその経験は軽微なものがほとんどであった。特に「飲酒」「夜遊び」が経験され易い行為であり、1度だけしか経験しない子どもにも、重ねて経験する子どもにも共通して見られる行為であった。この結果は、松元（1990）の指摘を裏付けるものであった。松元（1990）は、飲酒・喫煙行為が、かつては、大人に反抗するためというようなある目的のための手段として存在していたのに対し、最近では、子どもたちの単なる遊びの1つ、刺激の1つとなってきたこと、また、他の問題行動と必ずしも繋がらずに飲酒・喫煙を行なう者が増えてきている一方で、色々な非行行動を取る子どもは、一般少年に比べて圧倒的に飲酒・喫煙を行う率が高くなってきていることを指摘した。麦島（1990）も、非行対策を考える上で、初回非行の抑制と再犯抑制とは視点を変える必要があることを示した。こうしてみると、「飲酒・喫煙行為が非行の第1歩」と言われているが、飲酒・喫煙行為そのものを問題視するのではなく、その行為が何度も行われ、習慣化することを危惧するべきではないのだろうか。

中学3年間に於いて逸脱行為が経験される時期の傾向を見てみると、「いじめ」「同年代に暴力」という行為は、1年生での経験が多く、学年の進行とともに徐々に減少してゆく傾向にあり、「夜遊び」という行為は、3年生での経験が多く、学年の進行とともに経験する子

どもが増えてくる傾向にあることが示された。これらの行為に関する発達上の発現傾向について、海外の文献においても同様の報告がされており、Lahey et al. (2000) は、「いじめや他者への暴力などの攻撃的な行動は13歳ごろ（中学1年生）がピークであり、また、飲酒、喫煙、無断外泊、深夜徘徊、薬物といった行為は年齢が上がるにつれて増えてゆく。」ことを示した。日本と諸外国とでは文化や社会状況、環境の違いなどが当然考えられるが、「いじめ」「同年代に暴力」「夜遊び」といった行為は、そのような要因に左右されず、発現時期の傾向に大差がないようであることを本研究では示すことが出来た。

逸脱行為の発現に関する性差について

本研究では、警察庁生活安全局少年課（2011）や先行研究の知見より、子どもたちの発達過程における逸脱行為の発現について、性による相違が見られるであろうと予測した。結果として、経験率から見ると、Lahey et al. (2000) が示唆したように「いじめや他者への暴力などの攻撃的な行動は男子に多く見られる」ことが明らかにされた。しかし、発達プロセスすなわちどの時期に現れやすく、頻度の増減傾向がどのような軌跡をたどるかについては、Bongers et al. (2004) が示した「いじめや他者への暴力などの攻撃的な行動や飲酒、喫煙、無断外泊、深夜徘徊、薬物といった行為では発達曲線の形状に男女差が確認され、盗み、万引き、恐喝、公共物破壊といった行為では男女差が認められなかった」というような男女差が本研究では確認されなかった。清永（1982）は、「男子不良行為少年と女子不良行為少年とでは男子の方が非行者発生率はやや高くなるものの、両者の間に決定的な差は無く、不良行為から非行への過程においても、女子少年の男子化が認められる」と指摘したが、本研究の結果においても、発現の時期や傾向に男女間での決定的な差は認められなかった。麦島（1990）は、近年の女子非行の増加に伴い、今後男子と同じような動向を辿るのではないかと予測したが、本研究の結果は、それを実証するかたちとなったといえるかもしれない。

今後の課題

本研究では、子どもたちが中学3年間で経験し易いと思われる逸脱行為に焦点を当て、その発現傾向について検討した。その結果、逸脱行為を1度も経験したことがない者は3割弱であることが明らかにされたが、中学3年間で1度も逸脱行為を経験しなかった子どもたちと何らかの逸脱行為を経験した子どもたちでは何か違いがあるのであろうか。また、ある行為を1回だけ経験した子どもたちとある行為を2回、3回と繰り返し経験した子どもたちでは何か違いがあるのであろうか。あるとすれば、これらの違いにはどんな要因が影響しているのだろうか。さらに、「非行から立ち直る」プロセスには、どのような要因が関与しているのだろうか。今後の研究において、これらの疑問に対する答えを見つけるべく、様々な角

度からの検討を重ねてゆかなければならない。

引用文献

- Bongers, I. L., Koot, H. M., Ende, J., & Verhulst, F. C. (2004) Developmental trajectories of externalizing behaviors in childhood and adolescence. *Child Development*, **75**, 1523–1537.
- Broidy, L. M., Nagin, D. S., Tremblay, R. E., Bates, J. E., Brame, B., Dodge, K. A., Fergusson, D., Horwood, J. L., Loeber, R., Laird, R., Lynam, D. R., Moffitt, T. E., Pettit, G. S., & Vitaro, F. (2003) Developmental trajectories of childhood disruptive behaviors and adolescent delinquency: A six-site, cross-national study. *Developmental Psychology*, **39**, 222–245.
- Coley, R. L., Morris, J. E., & Hernandez, D. (2004) Out-of-school care and problem behaviors trajectories among low-income adolescents: Individual, family and neighborhood characteristics as added risks. *Child Development*, **75**, 948–965.
- 警察庁生活安全局長 (1999) 不良行為少年の補導について (平成11年丙少発第19号) 東京：警察庁
- 警察庁生活安全局少年課 (2011) 平成22年中における少年の補導及び保護の概況 東京：警察庁
- 清永賢二 (1982) 不良行為少年における非行化過程の研究 科学警察研究所報告防犯少年編, **23**, 1–8.
- 清永賢二 (1990) 少年の非行性の進行とその背景 総務庁青少年対策本部 (監修) 青少年非行問題研究会 (編) 青少年の非行問題 —ス界の専門家による提言にみる—, 135–146. 東京：ぎょうせい
- Lahey, B. B., Schwab-Stone, M., Goodman, S. H., Waldman, I. D., Canino, G., Rathouz, P. J., Miller, T. L., Dennis, K. D., Bird, H., & Jensen, P. S. (2000) Age and gender differences in oppositional behavior and conduct problems: A cross-sectional household study of middle childhood and adolescence. *Journal of Abnormal Psychology*, **109**, 488–503.
- 松元泰儀 (1990) 少年による飲酒・喫煙の現状と問題点 総務庁青少年対策本部 (監修) 青少年非行問題研究会 (編) 青少年の非行問題 —ス界の専門家による提言にみる—, 135–146. 東京：ぎょうせい
- 緑川 徹 (1999) 初発型非行—豊かさが生みだす浮遊非行— 清永賢二 (編) 少年非行の世界, 36–65. 東京：有斐閣
- 麦島文夫 (1990) 初発型非行の特徴と対策 総務庁青少年対策本部 (監修) 青少年非行問題研究会 (編) 青少年の非行問題 —ス界の専門家による提言にみる—, 115–134. 東京：ぎょうせい
- Nagin, D. S., & Tremblay, R. E. (1999) Trajectories of boys' physical aggression, opposition, and hyperactivity on the path to physically violent and nonviolent juvenile delinquency. *Child Development*, **70**, 1181–1196.
- 西野泰代・氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光・山本ちか (2009) 中学生の逸脱行為の深化に関する縦断的検討 心理学研究, **80**, 17–24.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2005) 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, **16**, 286–299.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2006) 中学生の非行傾向行為の先行要因—1学期と2学期の縦断調査から— 心理学研究, **77**, 424–432.
- Pettit, G. S., Bates, J. E., Dodge, K. A., & Meece, D. W. (1999) The impact of after-school peer contact on early adolescent externalizing problems is moderated by parental monitoring, perceived neighborhood safety, and prior adjustment. *Child Development*, **70**, 768–778.
- Rueter, M. A., & Conger, R. D. (1998) Reciprocal influences between parenting and adolescent problem-solving behavior. *Developmental Psychology*, **34**, 1470–1482.
- 総務庁青少年対策本部 (1999) 非行原因に関する総合的研究調査 (第3回)
- 鈴木真悟 (1984) 自己報告法による非行体験の年齢的变化 科学警察研究所報告防犯少年編, **25**, 149–159.

Summary

Developmental Trajectories of Deviant Behaviors
among Junior High School Students

Yasuyo Nishino

This study aimed to investigate trajectories of deviant behaviors experienced by students during their three years of junior high school. Students participated in questionnaire survey every September. Two thousand four hundred seventeen students' cross-sectional data and three hundred forty-four students' longitudinal data were used for analysis. Nineteen categories of deviant behavior were examined, such as smoking, roaming at night, drinking alcohol, bullying, truancy, violence, stealing and so on. The longitudinal data indicated that more than seventy percent of the students experienced deviant behavior over once during their three years of junior high school. The data also indicated that "roaming at night" was most frequently experienced of the nineteen deviant behaviors, and that either boys or girls more often experienced deviant behaviors as they became senior.

【Key words】 junior high school students, deviant behaviors, developmental trajectories